

教えるということの魅力 ～子どもの可能性を信じて～

アスポート所沢 教育支援担当 **大日方 進也さん** (文化情報学部2002年度卒業)

現在の生活

埼玉県が実施している教育支援事業、「アスポート」の教育支援員として働いています。具体的には、生活保護世帯で育った子どもが大人になって再び生活保護を受ける「貧困の連鎖」を断つために、県内の生活保護受給世帯の中学生を対象とした学習教室で、それぞれの子どもに合った学習の支援をしています。

学習教室は、学校のような講義形式ではなく、近隣の大学生によるボランティアがマンツーマンで教えています。中には九九ができない子もいれば、アルファベットの小文字が書けない子もいます。学校ではそういった子に対して細かいフォローができないこともあります。学習教室ではつまづいているポイントまでさかのぼって、つまづきを解消してから今の勉強に戻る、といった進め方をしています。

また、この学習教室の参加へつなげるために、対象世帯の家庭訪問も行なっています。勉強に関すること以外でも、進路の相談に乗ったり、学校で悩んでいることがあれば関係各所とのパイプ役を務めたりすることもあります。保護者の皆さんとお会いしてよく聞かぬのが、お金がないから子どもを塾に行かせてやれないという悲痛な声です。クラスメイトは塾に行っているけれど、自分の子どもには何もしてやれず無力だと嘆いている人もいます。そんな保護者の方に学習教室の案内をすると、ぜひ子どもを行かせたいと言ってくれます。それでもじっくり話を聞き、子どもの目的に沿うような進学先と一緒に探っていきます。

仕事の魅力

自分が教えた子どもの中に、理科の学習で、星の動く角度は1時間に何度?という計算ができない子どもがいました。360度を24時間で割れば算出できるのですが、その子は答えにたどり着くまで「18かな? 14かな? 16かな?」と一つ一つ答えを当てはめて計算するやり方をしていました。

そのとき、自分は横についてその子が計算する過程を見守っていました。15という答えを導きだせた時、その子の表情が明るくなり、「星は1時間で15度も動く」ということを理解したようでした。

答えを教えてしまうことは簡単です。しかし、答えを自分で「導き出せた」という、ある種の成功体験が今の子どもには必要ではないかと考えています。解らないポイントでつまづいていると、そのまま授業は進んでしまい、その後の内容も理解できないままということがあります。そういった状況では、問題が解決したという成功体験もなく、知的満足感や充足感も得られないままになってしまいます。

子どもたちがよく、「分からないから嫌い」と口にします。これは言い換えれば「分かれば好きになれる」ということだと思えます。そんな子どもたちが勉強に取り組み、分からないことが分かるようになった成功体験を与えることができる、そして勉強することに前向きになってもらえる。そんな魅力が人に教える仕事にはあります。

今後の目標

人に教える仕事を続けたいと考えています。これは前述の魅力もありますが、人に教える仕事は、その子どもの将来の一部、言い換えると、その子どもが生涯で築く歴史の一部になれるということです。もちろん全ての子どもに喜ばれる先生になれるとは思っていません。「あんなイヤな先生がいた」といった記憶でも、「こんな良いこと言ってくれた先生がいた」という記憶でも、歴史の一部に加わることができるのなら、とてもやりがいのある仕事だと思います。

在学生へのメッセージ

教育現場には色々な問題が内包されています。テレビドラマのように一話完結で



ハッピーエンドとはいきません。納得できないことや理不尽なこともたくさんあります。何でこんな思いをしなくてはならないのかと考えたこともあります。それでも子どもたちに教えることは、とても重要な仕事だと思えます。

私は、今の仕事の前に映像作りの講師をしていた時代があるのですが、受講生の中から将来、映画監督が生まれ、監督を志した理由で「高校生の時に映像を作ったのがきっかけ」と言ってくれるかもしれないと考え、自分のしていることは決して無駄なことではないと信じることができました。今、教えている学習教室の子どもたちが大人になった時に「自分が通っていた学習教室のように子どもたちに教える仕事をしたい」と思ってくれるかもしれません。そういった可能性の幅を広げることのできる仕事に魅力を感じられたら、教育に関する仕事は非常に有意義な現場になると思います。

Profile

■ おびなた しんや

長野県長野市出身。
文化情報学部2002年度卒業生。
大学院文化情報学研究所2004年度修了生。

